



特集

地方馬産史③ ウシウマ「珍獣」とよばれた馬

TOPICS

御霊会風流馬入れ 島根県隠岐郡玉若酢命神社
「馬 アジアを駆けた二千年」-特別展と記念講演-
合戦場の馬 戦国の城と馬 -馬の博物館特別展より-
木曾馬がつなぐ人と地域と文化

馬事協会Information

通常総会で平成22年度事業計画を承認
【平成21年度】優良農用馬生産者を表彰
馬能力向上推進事業が開始される
種雄馬7頭を配置



社団法人 日本馬事協会

馬事協会便り

2010年10月 第5号

目次

- 01 **地方馬産史 3 ウシウマ**
「珍獣」とよばれた馬
高草 操
- 04 **御霊会風流馬入れ**
(島根県隠岐郡玉若酢命神社)
奥本 智
- 06 「馬 アジアを駆けた二千年」
-特別展と記念講演-
- 08 戦国の城と馬
合戦場の馬 -馬の博物館 特別展より-
長塚 孝
- 10 「第4回全国スポーツ流鏝馬競技
遠野物語発刊100周年記念大会」を
盛大に開催!
八重樫 正久
- 12 日光東照宮の儀装馬車を訪ねて
- 14 家畜改良増殖目標(抜粋)
- 16 木曾馬がつなぐ人と地域と文化
中川 剛
- 18 JRA馬事公苑「第42回 愛馬の日」
チャグチャグ馬コに
帯広競馬場から、初参加! 三宅 洋一
- 19 馬の切手(イタリア) 田内 昂作
- 20 第23回日本ウマ科学会学術集会のお知らせ
にっぽん、馬紀行
- 21 書籍紹介
- 22 JRAホースショー(第39回馬事公苑馬術大会)
ちびっ子“のまうま祭り”in うえのどうぶつえん
- 馬事協会インフォメーション**
- 23 種雄馬7頭を配置
- 24 馬能力向上推進事業
(馬能力評価の調査・検討事業)が開始される
- 26 種雄馬管理規程及び乗用雌馬貸付規程の
一部改正並びに種雄馬配置料規程の制定について
- 28 通常総会で平成22年度事業計画を承認
- 29 【平成21年度】優良農用馬生産者を表彰

●表紙写真／昭和11年(1936年)11月17日
天覧に供されるウシウマと田上七之助(左から2番目)
／田上源九郎氏所蔵



ウシウマの模型／西之表市鉄砲館所蔵

地方馬産史 3

ウシウマ

「珍獣」とよば

ウシウマは、かつて種子島で飼育され、まえがみ、たてがみ、尾の毛が極端に少なく、牛に似ていることから「ウシウマ」、島では無毛という意味で「ゴンボウ(ゴボウの方言)」とよばれた馬。無毛の「禿型」と「縮れ毛型(縋型)」の2種類がいたとされ、驚くほど長寿だったという。昭和6年(1931年)、「珍獣」として県指定の天然記念物となったが、昭和21年(1946年)に絶滅した。西之表市(種子島)には、ウシウマの貴重な骨格標本が保存されている。

～ウシウマの骨格標本～

鉄砲伝来の地、そして今はロケットの基地として有名な種子島。長さ58km、幅最大12kmと南北に細長く、一番鹿児島本土に近い西之表市、島中央部の中種子町、そして宇宙センターがある南種子町からなる。3つの町は気候、地形、風土が異なり、それぞれの地域で作られる焼酎も個性豊か。島全体は比較的なだらかで、標高の高い山はない。海岸線は長い砂浜が続き、ウミガメの産卵地として



ウシウマの骨格標本／西之表市鉄砲館所蔵



禿型／西之表市鉄砲館所蔵



縮れ毛型／西之表市鉄砲館所蔵



縮れ毛型／第一号平山号(牝栗毛)



禿型／第三田上号(牡栗毛)



れた馬

高草 操

も知られる。また多くの民俗芸能が今に受け継がれているという島だ。

ウシウマの骨格標本が展示されている種子島開発総合センター、通称「鉄砲館」は、西之表市の高台にある。種子島の地理、歴史、生き物、人々の暮らしを知ることができるとても興味深い博物館。その入口にウシウマの骨格標本と、その複製が展示されていた。

「ウシウマ」という名から気になっていた蹄は奇蹄目。明らかに馬である。体高121cm、昭和31年に西之表市内で発掘された「第2平山号」の骨格だと記されていた。

資料によれば、それは鹿児島大学の林田重幸教授の依頼によって、種子島出身で農学部教授だった長野慶一郎氏が、ウシウマを飼育していた田上家の庭から掘り出したもので、27歳という推定年齢や体高から、「第2平山号(牡)」という個体の骨であることが確認されたのだという。その後、骨格は横浜根岸の馬の博物館に移管されたが、西之表市の強い要望により、再び故郷に戻った。そ

のとき西之表市の代表として馬の博物館まで出向いたのが、長野慶一郎教授と当時の西之表市長井元正流氏、そして鉄砲館の館長だった鮫嶋安豊氏だった。現在も種子島観光事業のプロデューサーとして活躍されている鮫嶋さん(67歳)は、「最初は永久貸与という形で骨格を持ち帰り、その後譲渡してもらったのです」と当時のエピソードを話してくれた。

ウシウマの骨格は鹿児島県立博物館にも保管されているが、それは最後のウシウマである「第4田上号(牡)」(1937年生まれ)のものだという。

～ウシウマと芦野牧～

ウシウマはもともとは日本の馬ではなく、慶長3年(1598年)、豊臣秀吉の朝鮮出兵に従軍した島津義弘が明軍から十数頭手に入れ、鹿児島に持ち帰った馬だった。ルーツは蒙古か中国奥地、あるいは西域ともいわれる。当初は鹿児島の吉野牧で飼育されていたが、ウシウマの体



牧の図(中種子町立歴史民俗資料館)

質には種子島の気候条件があうと判断した21代藩主綱貴が、天和3年(1683年)、島津藩の家老だった島主種子島久時に5頭のウシウマの飼育を命じた。久時は、種子島家の鷹狩場所である安城村(現・西之表市)の芦野にウシウマ専用の牧を設けた。芦野牧は島の中でも特に温暖な場所で、ウシウマの数を増やすことに成功し、天保年間には50頭、明治初期には60頭ものウシウマがいたそうである。

種子島におけるマキ(牧)はもともと同族、群れを軸とした共同体精神を意味していた。それが1348年ごろに海岸地帯で塩を作るマキが発足し、牧は塩の運搬用である牛や馬を育てることを目的とする場所になっていった。このような塩屋牧のほか、個人や部落が所有する民間牧、当主直営の御用牧、薪運搬用の馬を育てる壺屋牧などがあり、多くの牛や馬が飼育された。島全体が牧だったため、人は牧の中に囲いをつくって住んだというけれど、種子島家の御用牧である芦野においてはウシウマは、他の馬と厳重に隔離して飼育されていた。明治4年(1871年)、公牧が廃止となり、すべてのウシウマが民間に払い下げられることになったけれど、一般農家ではウシウマ飼育の知識に乏しく、その数は激減した。明治22年(1889年)、ついに島内には雄1頭だけとなり、雌はいなくなっていた。

～田上七之助とウシウマ～

そんな事態を憂えてウシウマの再生に取り組んだ人がいた。西之表の実業家、田上七之助だ。西之表にいた28歳という老齢のウシウマの牡馬・明治号を探し出し、自分の牧場で育てていた島在来の牝馬の群れに放して、自然交配を試みたのである。1892年、ようやく2頭の牡馬が生まれたが、どちらも「縮れ毛型」だったという。一頭は金濱号と名づけて種馬とし、もう一頭は明治31年(1898年)に当時の鹿児島県知事加納久宣を通じ

て東京の上野動物園に寄贈した。その記録と寄贈された馬の写真が「上野動物園百年史」に記されている。

田上七之助は、金濱号からさらに在来の牝馬との交配を進め、大正6年(1917年)に初めて「禿型」の牝馬の生産に成功した。それがよほど嬉しかったとみえ、上京の折には宿のある世田谷三軒茶屋から銀座あたりまで、金ぴかの鞍や紅白の手綱、鈴をつけたウシウマにまたがっての東京見物や、種子島へ帰る途中には阪神の鳴尾競馬場において大群衆の前でウシウマによる単独競走をするなど派手なデモンストレーションをしたと伝えられている。残念ながらその「禿型」の牝馬には繁殖能力がなく、七之助は再び上野動物園に寄贈した。ウシウマは昭和6年(1931年)、国の天然記念物に指定された。さらに昭和11年(1936年)、昭和天皇が鹿児島島の陸軍演習に巡行された折には、第一田上号という禿型の生産馬が天覧に供されている。七之助自らが手綱を引いて天皇の前に進み出たとき、馬が大きくないいたと、当時の新聞に取り上げられたそうだ。

田上七之助は、先見の目がある実業家といわれ、多くの事業を成功させ、巨万の富を得た人である。その財力をもってウシウマの保存に心血を注ぎ、24頭ものウシウマを生産した。自分では2、3頭のウシウマを所有し、あとは、親類などに預けていた。現在安城村在住で七之助の孫にあたる田上源九郎さんは、まだ小学生だったころ、祖父の生産したウシウマを見たことがあるという。皮膚が薄い上に尾に毛がないため、夏は虫を追い払うことも出来ず、冬は寒さに弱くて毛布をかけたりしていたそうだ。さらに「気性が荒くてあまり農耕には向かなかったようです」と話してくれた。

七之助は昭和12年(1937年)88歳で他界。ウシウマの飼育は一族に引き継がれたけれども、戦争をはさんで昭和21年(1946年)に最後のウシウマ第4田上号が栄養失調で亡くなり、ついにウシウマは絶滅してしまった。



田上七之助氏



畑が広がる現在の芦野1



畑が広がる現在の芦野2

～種子島の馬として～

ウシウマの絶滅から半世紀以上、現在の芦野は、島外から移住してきた人々が住み、かつて牧だったという丘から海岸に向かって続く斜面のほとんどが畑になっていた。畑作が盛んな中種子町や、水田が多く馬耕が盛んだったという南種子町も訪ねてみた。特に南種子町では平成8年ごろまで馬を飼っていたという集落が点在する。馬産とともに馬耕に力を注いでいた歴史があり、種子島在来の馬と人々が暮した記録が残る。けれども、そこにウシウマの姿を見出すことはできなかった。無毛という特異な姿が珍重され、島主種子島家によって厚く保護されてきたウシウマも公牧廃止によって農家に払い下げられたとき、毛がなく皮膚が薄くてケガをしやすい体質が仇になり、ウシウマは行き場を失ってしまった。戦時中の飼料不足も災いした。「珍獣」とよばれたゆえにたどった馬たちの運命はなんとも切ないけれど、ウシウマが数百年をかけて、種子島特有の馬になったことは確かである。

「種子島は昔から外来の文化を寛容に受け入れ、それを自分たちの文化として育てることが上手だったので

すよ」と鮫嶋さんは言う。鉄砲をはじめ、島の特産である唐バサミ、甘藷なども、もとは外来文化だった。種子島のウシウマを調査・研究した鹿児島大学の日野光次教授や植村巻太郎教授の報告書には、ウシウマが種子島の固有種だという見解が記されている。たとえば津軽藩で時々生まれた尾に毛のない「牛房馬」が体質の弱さゆえ人々に嫌われて安価で売買されたという記録にふれ、温暖な種子島においては、そのような馬が誕生するとその子孫を残し、保存してきたのではないかと推測する。そして、今日残っているウシウマは、長年にわたる在来の馬との交配によって存続してきた馬で、種子島の馬とみて差し支えない、と言っている。ウシウマの故郷は今までもこれからも、種子島なのだ。

ふと思った。もしウシウマが今の時代に存在していたならば、その運命は違っていたのではないか。犬の世界でもヘアレスドッグが人気品種となっているし、なんといっても皮膚の薄さは、競走馬であるサラブレッドにとっては名馬の条件でもあるのだから。

(たかくさ・みさお フォトグラファー)

参考資料

- * 日野光次「ウシウマ、牛馬」(「鹿児島県史蹟名勝天然記念物調査報告書」昭和13年)
- * 植村巻太郎「ウシウマの研究」(「日本畜産学会報」昭和12年)
- * 林田重幸「ウシウマの骨格」(「鹿児島県文化財調査報告書」)
- * 井元正流「種子島今むかし」(八重岳書房)
- * 早坂昇治「馬たちの33章」(緑書房)
- * 「西之表百年史」
- * 「目で見える種子島 屋久島の100年」
- * 「上野動物園百年史」
- * 「かごしまの20世紀」(南日本新聞1999年)
- * 「中種子の牧の資料」(中種子町立歴史資料館 昭和62年)
- * 「わたしたちの種子島」(西之表市教育委員会・西之表市文化財保護審議会)
- * 「ふるさと歴史散歩 第2集」(西之表市教育委員会)
- * 「南種子町の文化財」(南種子町教育委員会・南種子町文化財保護審議会)



一般道から神社に入る



じ れ え ふ り ゆ う 御霊会風流馬入れ

しまねけん おきぐんたまわかすみことじんじゃ
(島根県隠岐郡玉若酢命神社)

奥本 智

玉若酢命神社の宮司億岐家には、御霊会について、一般にこの言葉の意味するものとは異なる伝承が伝わっている。社蔵の安永8年(1779年)の記録には「5月5日大祭なり。これを御霊会と言。中夏の季を以て之を祭り、専ら国民の安穩、五穀豊饒を祈るの儀を以て祈年祭となす」とある。

通常「御霊会」といわれる行事は、往時、疾病や祟りの原因をなすと考えられていた死者の靈魂、とりわけただならぬ死に方をした亡者の靈魂「御霊」を鎮める祭りであって、いわゆる「御霊信仰」に基づくものであった。貞観五氣(863年)5月20日、平安京の神泉苑で行われた「御霊会」が文献に見ることができる最古のものであるが、その後まもなく京都の八坂神会や祇園系の神社の夏祭りに受け継がれて、日本全国にたちまち広範な分布をもつようになった玉若酢命神社の億岐家ではここ数代、安永8年の文献を受けて自社の御霊会は祈年祭であり、五穀豊穰を目的とし天下泰平・国家安穩すなわち国家や国民の安寧を願う祭りであるその証拠に、神輿の上に止まる鳳凰は稲穂の束をくわえており御供には必ず小さな粽を出し御旅所の祭典に御田植えの神事が行われたそうです。

また御霊会という文字はゴリョウエとは読まず、ゴレエと読んで、一般の悪霊を鎮める御霊会とは異なることを主

張し、惣社である玉若酢命神社に隠岐全島各地の氏神の御霊が神馬に乗って相集う会、それが惣社の祭り御霊会である。

若玉酢命神社の御霊会は、一般に行われる祈年祭に加えて、各地の氏神の御神霊を神馬に乗せて集める関係上、どうしても祭りの中心は華やかな馬入れの神事に重点を置くようになった。したがって別の言い方をすれば、6月5日の玉若酢命神社の例大祭は、午前中に行われるのが主として祈年祭であり午後に行われる馬入れの神事を中心にした祭りが主として御霊会ということになる。

また、玉若酢命神社の御霊会で重要な役目を担う隠岐では素朴にシンバと訓み、シンメとは訓まない。ただし、これを東郷・飯田・大久地区の東3頭の神職たちが祝詞のなかで訓むときは、ミウマから変化したらミムメと訓んでいる。神事に参加する神馬は現在合計8頭それぞれが鞍の上に御幣を立てて各地の氏神の依代^{よしろ}としているがそれが昔は48頭でその神馬の背には巫女と思われる乙女が乗っていたそうです。現在でも神馬は、玉若酢命神社に行くときは、旧道を歩いて行きます。一番遠い大久地区は、3時間半程かかるそうです。途中各休憩所でお神酒をもらい、西郷町内で大久、飯田、東郷、西郷地区東側の4頭の神馬を



尻尾持ちが一番危険



馬入神事



神様を御飯屋に入れる



馬入神事に向う人馬

残り1時間程になったところで玉若酢命神の近くにある置屋に休ませます。西側の4頭も加茂・原田・有木・下西地区の5神馬も一番遠い所の加茂地区も約3時間半程の道程を東側と同じようにして歩いて玉若酢命神社の近くの置屋に神馬を休ませます。午前中に行なわれる祈年祭が東3地区の大久・飯田・東郷の東3頭の神職たちが祝詞を行い、それが終わって午後から馬入神事が行われる。先頭は、東郷・飯田・大久・加茂・西郷・有木・原田・下西の順に馬入が行われます。1頭の馬に6名の若者達が付きます。先頭に立つのが竿止しそして馬の顔の両側に1人ずつ腹に1人ずつ尻尾を持つ人が馬の尻を叩いて馬に気合を入れ200メートル程の参道を一気に走り上がります。賽銭箱の前で竿止役の人が馬の前に立ち各地区の幟の付いた竹竿を横にし馬を止めます。次に御飯屋のある地元のことばでお殿小屋に2回目の馬入れで50メートル程を走ります。終わりに神送り神事で原田・有木地区以外の6頭の神馬が参道を最後の走りを行います。これで御霊会が終わりです。

馬入神事に参加する若者達は神馬と友に3日間寝食を共にします。以前は1週間程前から寝食を共にしていたらしいです。

(おくもと・さとし 隠岐どうぜん農業協同組合 調査役)



流鎗馬神事を行う所に向う

「馬 アジアを駆けた二千年」 特別展と記念講演

平成22年7月13日から9月5日まで九州の古都大宰府にある九州国立博物館で同博物館開館5周年記念特別記念イベントとして「馬 アジアを駆けた二千年」が開かれました。

「東風吹かば においおこせよ 梅の花 あるじなしとて 春なわすれそ」(拾遺和歌集)で有名な菅原道真が祀られてある大宰府天満宮の境内に入り、3つの太鼓橋を渡って右手に折れて少し歩き、エスカレーターと動く歩道を通してトンネルを抜けると、小高い山の中

腹を切り開いて建てられた超近代的な九州国立博物館が目飛び込んできました。博物館の前の広場では、本物の馬と仲良しになろう! 「ポニーとのふれあいイベント」が開かれ、子供たちが、ある子はこわごわ、また、ある子は楽しそうにポニーにまたがり馬とのふれあいのひと時を過ごしていました。

博物館2階にある特別展示展の入り口前にはパンフレットに紹介されていたうまやずびょうぶ 厩図屏風の巨大馬絵が入館者を歓迎していました。

特別展示は4つの章から構成されていました。第1章が「人と馬との出会い」、第2章が「アジアを駆けた馬」、第3章が「黄金の馬」、そして最後の第4章が「神馬の誕生」となっていました。第1章では馬の祖先である「ヒラコテリウム」の模型(今の狐ほどの大きさ)の展示に始まり、地球における馬の誕生が紹介されていました。第2章ではアジア各地や日本での4~5世紀ごろの馬具、埴輪などが展示されており日本での出土品がアジアのそれと似ていることか



博物館前のイベント「本物の馬と仲良しになろう」で楽しむ子供たち

特別展示の入り口の巨大パネル(厩図屏風)



国宝

鞍 奈良県藤ノ木古墳出土
古墳時代・6世紀
文化庁蔵

〈展示期間〉
7月13日(火)～8月13日(金)

鞍のうち、前方に取り付けられた金銅の金具。六角形の透かし彫りの中には、象や鳳凰などシルクロード経由で伝わったさまざまな文様があらわされている。

ら、日本の馬文化がアジアから伝わってきたことを教えてください。そして第3章では奈良の藤ノ木古墳をはじめ関東、近畿、九州各地の古墳(6世紀ごろ)から出土した黄金の馬具が展示されました。第4章では江戸時代ころになると馬が神事や競い馬として利用されたことを示す屏風や飾りものが展示されていました。

もともと日本には馬はいなかったなかで、今から1600年くらい前にアジアから乗馬用の馬とその飼育や金銅製馬具制作の技術を伴って渡来しました。渡来後、王や豪族たちはさまざまな儀礼の中で黄金色の馬具を身にまといその威厳を高めるために馬を利用しました。その後中世になると武士の重要な戦力として重宝され多くの馬がその足跡を残してきました。さらにその後、馬は神馬としても篤く信仰され飾り馬や競べ馬の行事が各地で行われました。これらの歴史的な馬にまつわる記念品が解説付きで展示されておりまして。その中で、圧巻だったのは6世紀の奈良県の藤ノ木古墳から発掘された金箔ぬりの各種装飾馬具(鞍、杏葉、雲珠、など、その多くは国宝)であり、1600年たった今もその黄金の輝きを失っていませんでした。

その日は、午後2時から、同じ博物館の中のミュージアムで馬に関する記念講演(セミナー)「日本人と馬 大和民族は動物の扱いがほんとうにへたなのか?」と題して、JRA競走馬総合研究所次長の楠瀬良氏の講演がありました。内容は非常に興味深いものでありましたのでそのエッセンスを紹介します。

「日本人は農耕民族であったことから動物の扱いはへただという説があるがほんとうにそうだろうか?」という疑問に答えてみたい。

魏志倭人伝の「無馬牛虎豹羊鵲」の記述からして、日本には縄文時代、弥生時代には馬はいなかった。紀元6世紀ごろ(今から1600年ほど前)大陸から船に乗せられてやってきた。それから、日本は一時戦国の世もあったが、平和な江戸時代が長く続いたこともあり、西洋と違って馬を戦争の道具としてはあまり使わなかったことから、きちっとしたしつけ・調教がなされなかった。馬を戦争の道具として使うにはちゃんとした調教が必須であり、西洋は戦争が頻発し馬を戦争の道具として重要視したため、きちっとした調教がなされた。明治維新になって、イギリスの新聞に「日本の馬はまるで猛獣のようだ」と日本を紹介した記事がある。当

時の日本人は馬の扱いがへただったと言わざるを得ない。その後、日本は富国強兵策をとり強い軍隊を目指した。強い軍隊には馬(軍馬)は必須であった。近代兵器の登場と敗戦により、馬は軍事的使命を終え、戦後は一時農耕用として重要視された。しかし、現在ではその使命も終わり、その多くは国民的レジャーとなった競馬としての利用が大きなウェイトを占めるに至っている。最近では競馬も国際的となり、競走馬の国際的な取引も盛んになっている。当歳馬のセレクトセールを観た外国人はせりに出される馬が極めておとなしいのに感心したという。競走馬の成績と調教との相関を分析すると、よく調教された(おとなしい)馬が相対的に競走成績もよかったという結論となった。

最初の設問の答えは「日本人は農耕民族だから動物の扱いがへたなのではない。ちゃんとした調教を行えば馬はそれに答えてくれる。調教技術があれば、人と動物はハッピーである。」ということでした。

以上、酷暑の中見聞した、九州の太宰府の国立博物館開館5周年記念特別展「馬 アジアを駆けた二千年」と記念講演の報告でした。

—馬の博物館特別展より—

合戦場の馬の

長塚孝



ちょうりょうずちんきんぐら

張良図沈金鞍(重要文化財)

／馬の博物館蔵

かつちゅう

甲冑を着たまま騎乗するため内側が深く
なっており、重量に耐えられるよう分厚い
素材を使用しています。

うまのかね

馬印(岩手県指定文化財)

／一戸町教育委員会蔵

なんぶうま

いわゆる南部馬に押す焼印で、スズメのデザインを使用
しています。左側の琵琶股(後脚の上股の肉が広く高
くついている部分)に押すのが原則でした。



最近では歴史ブームといわれ、大河ドラマに関する地域では観光客があまた押し寄せる現象が続いているようですし、主人公を扱った歴史書も多く出版されています。ただ、当然のことながら時代劇はもとよりフィクションなので、戦国とか幕末維新の時代を正確に描いているわけではありません。「本当はどのような生活をしていたのだろう。」番組を見ていて、たまにはそんなことを考えることがあります。

たとえば、戦国合戦で騎馬武者が敵陣に進む時、中には鉄砲・弓矢に当たり落馬する人物もいます。でも、馬が狙撃されることはまずありません。突撃してくる武士を迎え撃つなら、馬に狙いを定める方が、的中率が上がります。それに武士が着ける甲冑はかなりの重さがあるはずだから、馬が転ぶだけでも武士はケガをする。そうすれば、敵を打ち取りやすいはずではないだろうか。

さすがに、ドラマでは馬の転倒シーンを大量に撮影するのは無理なので、馬が狙撃されていく場面が放映されることは、あまりありません。しかし、馬を狙ってはいけないなどという習慣があるはずもないので、戦国武士は本気で敵の馬を狙ったと思われます。だとすると、当時の人々は戦場で馬に損害を与えないように、いろいろ対策を講じて

いたはずですが。ここでは、現在知られている例から、二つほどご紹介しましょう。

ひとつの方法は、馬を最前線に出さないことです。イエズス会せんきょうしの宣教師ルイス・フロイスは、日本の兵士は戦場に到着すると馬から降りて戦うと報告しています。フロイスは、キリスト教を布教するため、日本人の習慣を丹念に調査しています。ですから、たまたま下馬げばして戦った合戦を目撃したということではありません。戦場におけるサムライの戦い方にも注意を払っていたというべきです。外国人の報告だけではありません。当事者の武士も語っています。徳川家康の家臣である大久保彦左衛門おおくぼ ひこざえもん みかわものがたりも、「三河物語」の中で同じようなことを記しています。ですから、敵の前で下馬するのは当時の常識だったとみて良いでしょう。

たしかに、人間よりも容積の大きい乗馬がいれば、戦場では恰好の的になります。貴重な愛馬を敵に狙撃されないようにするには、馬を射程圏外へ後退させるのが、もっとも簡単な防衛方法でしょう。そうすると、馬から下りた前線の武士たちは、機動力がなくなりますから、これを別の方法で補って戦おうとするはずですが。室町時代以降、甲冑かつちゅうは軽量化が進みます。それは、大量の徒歩武者かちが登場して、騎馬武者を圧倒するようになったからだといわれます。

うまよろい
馬鎧／馬の博物館蔵

大坂の陣で使用したと伝えられています。馬の顔に着ける
ばめん
馬面は、それより15年以上前に製作されたと推定されます。



ぞうひょうものがたり
雑兵物語／馬の博物館蔵

あしがる
江戸時代初頭に足軽たちの経験談を聞き集めた兵書です。
うまとり とうろく
掲載したのは馬取の藤六の部分で、陣中で馬が騒いだとき
の対策を語っています。



おおさかなつ じんずびょうぶ
大坂夏の陣図屏風／大阪城天守閣蔵

うまよろい
攻め手の軍勢に馬鎧を着けた騎馬武者が描かれています。
大坂城よりの狙撃に対抗しているのを表したのでしょう。

ですが、騎馬武者にとっても下馬して戦闘するならば、甲冑は軽いにこしたことはありません。軽量化は、下馬した騎兵も身軽に動けるようにしたことでしょう。

馬を守る二つ目の方法は、馬自体を武装させることです。戦場で甲冑を着けるのは、何も人間に限る必要はありません。鉄砲玉や弓矢が飛んでくるなら、馬も防具を着けていれば良いのです。鎌倉時代の軍馬についてはよくわかりませんが、室町時代中期以降には馬面と呼ばれるマスクをかぶり、馬鎧と呼ばれるヨロイを着けることが行われるようになりました。馬鎧は人間の鎧と同じように、小札とこざねと呼ばれる小さな板状の革製品をヒモや糸でつなぎ合わせて、馬の体をくるみます。中央には鞍が置かれますから、馬鎧は前半身の部分と後半身の部分に分かれます。構造は人間用と大幅に異なることはありません。そして武士の甲冑と同じように、さまざまな飾りが施されるようになりました。

テレビドラマにはまったく登場しませんが、馬鎧はかなり存在したようです。武田信玄は家臣に対し、馬鎧が不足しているので至急用意するよう命じていますから、敵軍にかなりの馬鎧があるのを調査したのでしょう。一般の家臣は、義務付けられなかったようですが、ある程度の地位に

ある者は黒と朱色の漆で家紋を描いた金色の馬鎧を用意するよう伝えています。

ほうじょううじまさ
小田原の北条氏政も、金色の紋を付けたりして、きらびやかにしておくことを、固く命じていました。馬鎧については、ただ購入して乗馬に着けておけば良いというわけではありませんでした。表面を漆で塗っただけの黒い馬鎧では、敵味方の区別がつかなくなるせいかもしれませんし、無印のふつうの馬鎧が普及していたせいかもしれません。

また、馬鎧は人間の甲冑と同じように、贈答品にもなりました。徳川家康は、織田信長に会うため安土城へ赴く時、大量の馬鎧をおみやげに持参しようとしていました。松平家忠という武将は、主君家康より馬鎧3点を製作するよう命じられています。ところが家康より派遣された使者は、馬鎧を受け取らずに帰ってしまいました。どうやら、できが悪かったようです。家忠は、あわてて作り直しを指示しました。信長へのプレゼントですから、特に優れたデザインで揃えたかったのでしょう。馬鎧の役割は、人間用の甲冑や鞍などと同様だったのです。

馬鎧があまり見られなくなるのは、大坂夏の陣以降です。平和な時代が、少しずつ近づいてきたころです。

(ながつかたかし 馬事文化財団)

「第4回全国スポーツ流鏑馬競技 遠野物語発刊100周年記念大会」

「スポーツ流鏑馬」という言葉だけを聞くと、皆さんはどのようなイメージをお持ちになるだろうか？

流鏑馬という言葉は耳にすることがあっても、「スポーツ流鏑馬」と聞き、正しく説明できる人はあまり多くはないだろう。日本古来の伝統武芸である流鏑馬をスポーツ流鏑馬として競技化したこの大会。簡単に言えば、従来の流鏑馬との違いは、「ルールがあるか無いか」の、この一言に尽きる。

「永遠の日本のふるさと」というキャッチフレーズで、民話の里として名高い、岩手県遠野市では、地域の活性化と観光振興を図る目的で、本大会を開催して今回で4回目となる。本年は柳田國男の「遠野物語」発刊からちょうど100年の記念の年であり、遠野市ではそれにちなんだ様々なイベントが企画され、本大会もその一事業として行われた。

大会の歴史を振り返ってみると、全国で歴史的に馬と深い結びつきを持つ市町村

で組織する「全国市町村ホースサミット連絡協議会」が開催する、「全国市町村ホースサミット」事業の一環として、平成18年度に「第1回全国スポーツ流鏑馬競技遠野馬の里大会」として、大会はスタートした。一昨年、遠野地域は、馬特有の家畜伝染病「馬パラチフス」が発生し、乗用馬・農用馬計41頭が淘汰されるという痛ましい事故が発生し、大会を自粛したため、今大会は2年振りの開催となった。会場も従来までの「社団法人遠野市畜産振興公社遠野馬の里」から、今回初めて宮守町の「柏木平優遊広場特設会場」での開催となり、国道283号線に面した、交通のアクセス・景観ともに抜群の立地条件のもと、例年を遥かに上回る観客が訪れた。

大会当日は、北は北海道、南は奈良県からの参加と、文字どおり全国大会であり、41名の選手が鮮やかな衣装を身にまとい、「一般の部」と「プロの部」の2種目に分かれて、人馬一体となったとなった競技が続いた。

競技は、走路190メートルで、幅2.5メートルのコースに、58メートル間隔で3箇所の的を置いたコースの下、「一般の部」は3走、「プロの部」は4走して順位を競った。今大会初めてプロの部の4走目は、サイドを変えて進行方向の右側に設置された的を狙う難易度の高い競技であり、全国屈指の技術に観客を釘付けにした。

今回、一般の部には29名、プロの部には13名の選手が参加した。例年に比較すると、多くの選手に参加いただき、当初は運営面での不安や競技のワンパターン化により、観客の飽きも懸念されたが、いざ競技が始まると、選手の迫力ある競技に観客も魅了され、運営サイドの取り越し苦労に終わった。

参加者の中には、今大会初めて流鏑馬大会に参加した方から、流鏑馬歴十数年を数える大ベテランまで、また年齢では下は15歳の中学3年生から、上は67才と50才以上の開きがあった。その中で、一般の部の「第4位」に、青森県の十和田乗馬倶楽部



©高草操

浪本あずさ選手

岡部保市選手



©高草操

を盛大に開催!

八重樫 正久



所属(以下「十和田」という。)の澤田佳子選手(中学3年生)が入るなどし、経験がものをいう競技の中での大健闘となった。

また、スポーツ流鏝馬競技は、従来の流鏝馬とは異なり、女性の参加者がとても多い競技である。プロの部で「第4位」の十和田の小野雪絵選手や、同じく「第5位」青森乗馬倶楽部所属の浪本あずさ選手など、数多くの才色兼備な女性の参加者の影響は今後の参加者もさることながら、ますますの観客の増加も予感させた。

地元の遠野郷馬っこ王国ライディングクラブ代表の菊池茂勝選手は、過去3大会は運営委員長ということで、競技には参加できずにいたが、今大会は還暦祝いの赤いちゃんちゃんこを身にまとい、念願の初出場を果たした。プロの部の1番手ということで、全41選手のトップを切ってスタートしたが、菊池選手の迫力は、その後の大会の盛り上がり大いに勢いづかせた。結果も、プロの部堂々の「第3位」であった。

プロの部で優勝した、福島県古殿町

流鏝馬保存会副会長、岡部保市選手は、前回大会「A級の部」準優勝からのリベンジを見事に成就させた。4走で11本のうち8本を的中した岡部選手は、「これまでに積んだ経験を自信に変えて挑戦できたのが良かった」と手放しに喜んだ。

猛暑列島が日本を縦断したこの夏。例年なら、冷涼な気候と思われる岩手県遠野市も暑く・熱い夏がやってきた。真夏の太陽の下、訪れた観客は、全速力で駆け抜ける馬の迫力と、選手の高い技術に大きな拍手を贈っていた。

従来、伝統的な流鏝馬界には封建的かつ閉鎖的な規律があって、一般人が容易に愛好できる環境とは言えなかった。しかし、平成14年7月、全国の流鏝馬愛好者が集まって流鏝馬競技連盟が創設され、北海道芽室町で初めての流鏝馬競技大会が開催された。ちなみに今年は、今回の遠野市を含め、全国で8つの流鏝馬競技大会が予定されている。

スポーツ流鏝馬は、今後日本のオリジナ

ル馬術競技として、今後ますます人気が出るだろう。衣装が煌びやかなうえ、老若男女、特に女性が多数参加できるところも魅力だ。

オリンピックでも披露されている馬場馬術が男女の差なく全世界に広まったのは、基本スタイルと徹底したルールがあるからだと思うが、各地で浸透してくれば、スポーツ流鏝馬もそれに匹敵する競技になる可能性を秘めていると思う。

日本古式ゆかしい馬術を基礎とした技術習得と、徹底したルール作りが進めば、スポーツ流鏝馬は単なる各地の馬事イベントではなく、立派に世界に通用する競技になるのではないだろうか。今後ますます競技人口が増えることを期待し、結びの言葉としたい。

(やえがしただひさ)

全国スポーツ流鏝馬競技遠野物語発刊
100周年記念大会実行委員会事務局
(遠野市農業活性化本部内)



小野雪絵選手

菊池茂勝選手



日光東照宮の 儀装馬車を訪ねて



社日本馬事協会では、2台の儀装馬車を所有しておりますが、有効活用を図るため、現在、共に世界遺産である京都の賀茂御祖神社(下鴨神社)と栃木の日光東照宮でご利用いただいております。この度、日光東照宮の馬車文化の振興計画や馬車の利用状況などをお聞きするため訪れてみました。

猛暑(残暑) 厳しい旧盆の日曜(15日)、世界遺産の日光東照宮を訪れた。浅草からの東武日光行きは、季節柄か席は全て埋まって立つ客が出る混みようであった。駅に着いて見るとバスは幾つかあって、なかでも中禅寺湖や東照宮への名勝地行きの乗り場は、既に大勢の人たちが並んでいた。バスは、しばらく走って商店街を通り抜けると参道への坂道を登り、10分ほどで石鳥居の建つ東照宮の入り口に着いた。バスを降り、早速、

表参道から表門を通して面会場所の社務所へと向かった。

そこには日光東照宮宮司の稲葉久雄さんが待っていて下さった。ご挨拶の後、早速東照宮と御神馬に関わる話を伺った。(以下、稲葉宮司の談話要旨)

40年ほど前の半農、半神職といった稲葉さんの実家の周りには、数多くの農耕馬がいた。当時馬は、農家にとって欠くことの出来ない財産であり、家族同様

に大切にしていた。家族同様でもあるその大切な馬が、戦争で徴集された暗い時期もあった。戦後になってしばらくして、農業の機械化とともに農村から馬の姿が無くなってしまった。このことを非常に残念に思われていたが、日光東照宮において春秋年二回行われる大祭、特に春の大祭での百物揃武者千人行列、ひやくものぞろいせんになむしやぎょうれつ神輿渡御祭、流鏑馬等の神事や催しに馬を調達することから再び馬に関わることとなった。流鏑馬用の馬の確保は難し



馬車運行の折返し地点

待機中の儀装馬車



馬車の運行状況

東照宮の表門



く、中央競馬会の育成牧場や宇都宮大学馬術部にお世話になりながら実施した。現在は、中央競馬会からの寄贈馬を東照宮に隣接した乗馬倶楽部で流鏑馬用として飼養している。

御神馬は、東照宮が建立された400年前から徳川将軍家或いは宮家から奉納され、常時5～6頭が恵与されていた。明治期においても天皇や宮家から下賜されたが、戦後は空白の時代が続いた。昭和47年に全日本の馬術大会の大障害競技等で大活躍を収めたニュージーランド産「バリーナ号」が奉納されたことにより復活、昭和52年にはニュージーランドの首相が来日された機会を得て御神馬1頭が献進され、その後更に2頭が献進され、東照宮では現在、御神馬2頭を繋養している。

稲葉さんは、馬への愛情と思い入れは深く、馬と関わりのある伝統行事を継承することによって馬事の更なる普及を考えておられる。一昨年、参道における馬車の運行を考えて、日本馬事協会に馬車借用を申し出たのもこうした思いの現れである。稲葉さんは、ニュージーランドを初めとして諸外国に流鏑馬ほか伝統行事の紹介で訪問しているが、特にローマでは、人混みの中を平気で馬車が走っているのを見て感動を覚えた。ロンドンやアムステルダムでも活躍する馬車を見た。これらの地では、馬と人とが普通に生活の中に溶け込んでいる。かつてはわが国でも、身の周りに馬がいた。馬と共に暮らす生活があった。そのような馬文化をもう一度蘇らせて、馬を通じて世界の人々と関わりを持って行きたいと考えて

いる。

馬車の運行は、国の天然記念物となっている杉並木上参道から二荒山神社間の往復650mで、昨年は約3,000人(4～11月)の利用者があった。馬車の担当者の五十嵐さんによると、参拝者は初め怖々乗るが帰り道は楽しそうに帰ってくるとのことであった。

稲葉さんは、将来的には日光駅から東照宮までを馬車運行すること、国の天然記念物に指定されている杉並木を馬車に乗って鑑賞するといった馬車文化の振興を考えている。

なお、稲葉宮司は、平成20年に、長年の間ニュージーランド国との理解・交流促進に貢献したとして、ニュージーランド女王功労勲章を受章されました。改めてお祝いの言葉を贈らせていただきます。

家畜改良増殖目標(抜粋)

平成22年7月公表
農林水産省

V 馬

1.改良目標

(1)改良事業の概要

馬は、古くは農耕、運搬等生活に密着した役畜として、また軍用馬として改良が図られてきた。戦後、農業機械や交通機関の発達によってその役畜としての役割は小さくなったものの、国民の健全なレジャーとしての競馬や日本古来の祭事等馬文化の継承に加え、近年では、安らぎや癒やし効果に着目したホースセラピーや乗馬、教育・観光目的等での利用が図られる等、その活用方法が見直されてきている。こうした中、現在では、農用馬(重種馬)、競走用馬(軽種馬)、乗用馬として、それぞれの用途に応じた改良が行われている。

(2)改良の現状

農用馬については、明治以降、大型化を図るため海外から重種馬を導入することにより改良を図ってきた。現在は、ばんえい競馬の成績による選抜及びブルトン種、ベルシュロン種等のかけ合わせによる雑種強勢を利用して、より大型で早熟、強健性を目指した馬の作出が行われている。一方で、交雑化が進むと、雑種強勢の効果が薄れてくるといわれており、純粋種の確保が課題となっている。また、純粋種については独立行政法人家畜改良センターにおいて品種特性、発育成績、繁殖性(連産性)及び体型資質について改良が行われている。

競走用馬については、海外からの優良種雄馬の導入及び国内の好成績馬を用いた次世代生産が行われ、ワールド・サラブレッド・ランキングにおいてレーティング115ポンド以上(注)の馬の頭数が世界4位となる等、国産馬の能力は海外産馬の能力に比肩するようになってきている。また、競走用馬のデータベース・サービスが整備され、生産段階においても競走成績、血統情報等に基づく改良の推進が図られてきている。

乗用馬については、競走用馬から転用された馬が約7割、海外から導入された馬が約1割を占めているのに対して、国内で乗用として生産された馬は約2割を占めている。また、国内の乗用馬生産については、海外からの導入種雄馬の活用等により改良が図られてきている。こうした中、多様化するニーズへの対応、需要に応じた生産及び能力等の評価と血統情報等を併せて改良することが課題である。

また、日本固有の遺伝資源である日本在来馬についても、その保存及び利活用の推進が課題である。

(注)ワールド・サラブレッド・ランキングにおいてレーティング115ポンド以上

ワールド・サラブレッド・ランキングとは、世界ランキング総括委員会が世界の競走馬の競走成績を基に各馬のレーティング(ポンド単位)を決定し、能力指数として公表するもので、レーティング115ポンド以上とは、国際グレードI競走を勝てる馬のレベルをいう。

(3)能力に関する改良目標

農用、競走用及び乗用のそれぞれの用途に応じた遺伝的能力を改良する。

①農用馬

強健性の向上を図るとともに、環境適応性が高く、性格が温順で飼料利用性の高いものとする。繁殖雌馬にあっては、繁殖開始年齢、受胎率、生産率、は育能力、連産性等の繁殖能力の向上を図るものとする。

また、ばん用にあっては、運動性に富み、けん引能力の高いものとし、肥育用にあっては、早熟で発育が良く、産肉能力の高いものとする。

■繁殖能力に関する目標数値(全国平均)

	繁殖開始年齢 2才の割合	受胎率	生産率
現 在	41%	71%	61%
目 標 (平成32年度)	50%	75%	65%

注1:繁殖開始年齢については、ばんえい競馬引退馬を除く。

注2:受胎率と生産率については、直近5年間の平均である。

②競走用馬

国際競争力を持つ、肉体的かつ精神的に強靱で、スピードと持久力に優れた競走能力の高いものとする。

③乗用馬

強健性の向上を図るとともに、性格が温順で動きの軽快な乗りやすいものとする。特に競技用馬にあっては、運動性に富み、飛越力、持久力等に優れたものとする。

(4)体型に関する改良目標

肢蹄が強く、体各部の均称の良いものとし、それぞれの用途や品種の特性に応じた体型とする。

(5)その他家畜能力向上に資する取組

①改良手法

ア農用馬

ブルトン種、ベルシュロン種等優良純粋種の維持確保とその適切な利用に努めるものとする。

また、優良種雄馬の広域利用による改良の推進及び人工授精技術(凍結精液の活用を含む。)の改善とその普及に努めるものとする。

けん引能力や産肉能力の評価方法の開発等を行い、その活用に努めるものとする。

イ競走用馬

血統の多様性に配慮しつつ優良な国内外の種雄馬及び繁殖雌馬の確保と適切な利用に努めるとともに、強健性・運動能力等の測定手法の開発に努めるものとする。

ウ乗用馬

多様なニーズに対応した馬の生産のために、優良な種雄馬及び繁殖雌馬の確保に努めるとともに、能力評価方法の開発等を行い、その活用に努めるものとする。

また、優良種雄馬の広域利用による改良の推進及び人工授精技術（凍結精液の活用を含む。）の改善・普及に努めるものとする。

日本在来馬についても、その保存とともに特長を活かした利活用を推進する。

②飼養管理

飼養管理の改善、特に馴致及び育成技術等の向上に努めるとともに、繁殖技術の改善・普及に努めるものとする。また、快適性に配慮した飼養管理（アニマルウェルフェア）についても、その推進に努めるものとする。

2.増殖目標

飼養頭数については、農用、競走用及び乗用のそれぞれの需要動向に応じた頭数となるよう努めるものとする。

また、日本古来の祭事等馬文化の継承に加え、安らぎや癒やし効果に着目したホースセラピーや乗馬、教育・観光目的等の多様な活用も重要である。

（参考）馬をめぐる情勢

我が国における馬の飼養頭数は戦後減少し続けており、用途ごとの飼養頭数においては、農用馬及び競走用馬が減少傾向である一方、乗用馬については近年漸増している。現在の飼養頭数は、農用馬1万頭、競走用馬4.5万頭、乗用馬1.5万頭、日本在来馬2千頭程度である。

馬の10年後のイメージ

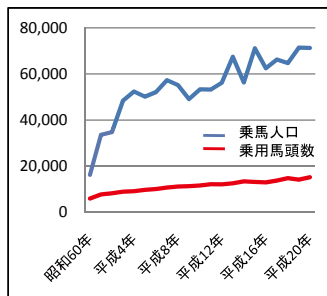
馬の多様な利用を通じて、国民の皆様に豊かさをお届けします。

馬は人にやすらぎ・癒し・楽しみをもたらします。最近では、教育やホースセラピー、地域振興への利用など、多様な試みが進められています。

乗馬人口は年々増加しており、乗りやすい温順な乗用馬の生産を振興します。



安全な乗馬の普及のために、温順で乗りやすい乗用馬が求められています。



一般的な乗馬だけでなく、教育、ホースセラピー、トレッキング、伝統芸能の継承（祭り等）といった馬の多様な利用に努めます。



健康増進だけでなく、自分より大きな動物との関わりによる情操面の成長も期待できます。

楽しみやリハビリの促進などを提供するホースセラピー。



大自然の中を乗馬で散策するトレッキングや、馬を使った地域文化（祭り等）が、観光誘致・地域振興に一役買っています。

科学データを用い強い馬を生産します。

競走能力を科学的に分析し、そのデータをもとに馬を育成することで、世界に通用する強い馬によるダイナミックな競馬を皆様に提供します。

それぞれの馬の「速度と心拍数」のデータも参考に調教・選抜・改良を進めます。



世界に通用する馬づくりで見応えのある競走を提供。



強い重種馬が演じる迫力あるばんえい競馬（そり引き競走）。

馬の多様な利用を進めることによって、国民の皆様に精神的に豊かな生活を提供するとともに、馬生産農家の皆様の経営安定を図ります。

生産性の向上に努めるとともに、科学的データを用いた育種改良方法についても研究を進めます。

木曾馬がつなぐ 人と地域と文化

中川 剛

9月12日、木曾馬のふるさと木曾町開田高原では地域の文化祭にあわせて、木曾馬シンポジウムが開催されました。午前の部では名古屋大学和式馬術部の協力のもと、木曾でおそらく初めてであろう打毬の披露。打毬とは、和式のポロ競技とも言われ、馬上でラクロスをやるようなものです。日本には9世紀ごろ、中国から伝わったと言われており、鎌倉時代には衰退したものの、江戸時代に8代将軍徳川吉宗が武芸鍛錬のために復興。以来地域によっては戦後まで続いてきたスポーツです。現在この打毬は、宮内庁、山形県山形市豊烈神社、青森県八戸市新羅神社が継承し神事などで行われるのみとなってしまいました。木曾馬の活用において、近年の和式馬術の流れから流鏝馬等への馬の利活用があるものの、子供たちへの普及を考えた場合に疾走する馬上で両手を離すことはなかなか難しく、初心者向きではないことからこの打毬に目をつけ、さらに、その昔尾張藩の天領だった木曾だからこそ理由として、現在も徳川美術館に保管されていると云う打毬具の再現も含め、打毬の復元を行った訳です。この打毬に使われる毬杖と呼ばれるステッキは今回木曾で打毬を復元するに当たり指導をいただいた騎馬文化研究家の清水唯弘氏の協力の下、山形県豊烈神社の毬杖を再現し、毬門と呼ばれる紅白共通のゴー

ルは宮内庁や山形豊烈神社と異なり、資料より紀州藩で行われていた網状の毬門を再現し、地域スポーツとしても楽しめるものとなりました。また、騎馬打毬は常歩でも楽しむことができ、引き馬でも可能で、一人で御す場合には片手綱と技術が要求されることから、騎手を育成するためにも楽しみながら良い運動になるのではないかと考えています。さらに、この打毬には騎乗しなくてもできる徒歩打毬というものがあり、先に紹介しました豊烈打毬会と加賀美流打毬では現在、次世代の育成のため徒歩打毬も行われている様です。徒歩打毬からの導入により馬へのアプローチをねらい、将来地元で馬の飼育をしてみたいと考える子供たちの育成をするとともに、地域のスポーツとしての定着を計っているところです。

さて、打毬披露ではまず、地元小学生を混ぜた3対3の徒歩打毬を5分ほど行いながら、打毬について毬の供給場所から毬門に毬を入れる際のルールや、毬の保持についてなどの説明を行い、2試合目は2対2の騎馬打毬を常歩を中心としたゆったりとした流れで見ていただきながら、馬上での毬杖の扱いを見ていただきました。徒歩打毬、騎馬打毬をそれぞれ見ていただいた後には打毬の体験ということで、実際の馬場を使い、毬を毬杖ですくい、毬門に投げ入れるという動作を徒歩打毬、引き馬での騎馬打毬で

体験していただき、騎士が何気なく行っている動作の難しさを体験していただきました。体験後は解説をしていただいた清水さんを騎士に迎え動きの比較的早い動き(馬場内の馬の動きに速歩や駆歩をいれて)の騎馬打毬を見ていただき、打毬披露を終了しました。

体験中数名の方に町のスポーツ大会の種目としての普及などお声をいただき、また町の担当者からも次年度以降、小学校での普及のため打毬具の町内小学校への配布を検討する考えなど木曾馬の利活用としての競技だけでなく、地域スポーツとしても今後の展開が楽しみになりました。

午後の部では東京農業大学バイオセラピー学科、滝坂信一氏の指導の下、セラピーの実演を行いました。ホースセラピーといえ一般的には障害を持った方が対象の療法、療育が取り上げられがちですが、今回は町民の方たちにより身近に馬を感じていただき、健康になるためのホースセラピーでの紹介ということで、実際に町長を始め4名(男性3名、女性1名)の方に乗っていただき、約20分ずつ滝坂氏の指導を受けつつ乗馬を行いました。騎乗の内容としては、軽乗鞍とよばれる鐙のない鞍を使い、まず始めに両手を前にして200mほど常歩で乗り、余分な力が抜けてきてから、指示のある体位をとって乗っていただきました。騎乗者のうち女性は肩こりがひどく、その改善もその場で行われました。騎乗者の感想としては、下馬後に「ふわふわしている感じ」など、体が軽くなった感じを皆さんが感じられたようです。

騎乗後は場所を小学校体育館に移し、パネルディスカッションが行われました。パネリストの自己紹介と今回乗った感想を話した後、滝坂氏からホースセラピー



目指すは「毬門」



名古屋大学和式馬術部による「打毬」の披露



子供達も体験打毬を楽しんだ



滝坂氏の指導でバランスをとる田中木曾町長

木曾馬の上でリラックス



パネルディスカッション—活発な意見交換が行われた

秋の気配漂う木曾
(写真提供:浦部良子)



一とはどんなものか、馬に乗るということがそれだけでも肩こり解消や便秘解消などのストレッチをするのと同じような効果がより効果的にあることを説明。続いて、この木曾地域で木曾馬を今後どのようにすれば利活用、保存につながっていくか話し合われました。会場からも岐阜県高山市で木曾馬を飼育している飛騨高山高校の生徒、長野県北佐久農業高校教諭、木曾養護学校教諭、松本市のNPO団体の方など多くの意見等をいただき、木曾馬の利用について現在そして将来的な地域ぐるみの乗馬利用者の受け入れについてのほか、他品種との特性の違いによるセラピーへの利点、工夫が必要な点などについても話題となりました。その中で、地域の人は7割くらい乗馬をしたことがあり、木曾馬を知っているものの、リピート利用が少ない割に、他地域では開田高原の認知度は低いものの、訪れている観光客のリピート率が高いことなどもわかりました。このことから、木曾馬の活用に関してもう一度木曾地域の人々とともに考えていくことができれば、馬だけでなく、森林セラピーなどと組み合わせることで木曾町が癒しの町として生きてくるのではないかと思います。また、

ホースセラピーは近年メディアでも多く取り上げられるようになり、乗ることだけが注目されていますが、馬への無理のないアプローチの仕方や乗馬以外での馬とのかかわり方がこの活動を継続し充実させるためには必要と考えられ、木曾馬だけでなく多くの乗馬セラピーの場で今後のカギとなってくるのではないかと思います。

現在、木曾馬は日本に約160頭が飼育されており、その多くが個人で飼育されており、活用の場面で木曾馬が登場することもここ数年新聞、雑誌等を見ても多くなりつつあります。しかしながら、いわゆる原産地域といわれる木曾を中心とした地域での生産は飼育者の高齢化とともに生産が減少し、種付けは原産地域で行われるものの、生産の場は遠く飼育者の元でということも増えつつあるなかで、木曾馬といわれて使われているものの、実際には血統書もなく血統不明な馬も多く出回っている現実もあります。少なくとも、馬は利活用されなければ生産し増やしていくことができない環境下にある中で、そのような立場にある馬も必要ではありますが、性質上とても穏やかで、働き者な純系木曾馬が、昔の

ような農耕馬や荷役馬としてではなく、乗馬を中心としたパートナーホースとして、今後いかに特性を活かし他品種と差別化を行い、純系木曾馬がいかに生き抜いていくか、そこには人とのつながり、地域とのつながり、文化とのつながりをもう一度見直していく必要があると考えています。「地域と文化と人」を互いにつなげる梯子となりうる要素が、この木曾馬そして木曾の地にあり、在来馬でもっとも歴史のある木曾馬だからこそできることをより多くの皆さんに知っていただければ利活用につながり、またそれが生産につながり、保存につながり木曾馬の未来も見てくるのではないかと思います。

最後になりましたが、今回、打毬に協力いただきました騎馬文化研究科の清水唯弘氏、名古屋大学和式馬術部の皆さん、セラピー実演にご協力いただきました、東京農業大学の滝坂信一氏、セラピー実演で騎乗いただきました4名の参加者の皆様、6頭の木曾馬を提供いただいた開田高原振興公社、そして木曾馬たちのためにこのような場所を提供いただきました木曾町に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

(なかがわ・たける 木曾馬保存会事務局)

～ JRA馬事公苑「第42回 愛馬の日」～



流鏑馬顔見せ・この後中止になった

9月23日秋分の日の朝9時30分、前日までの天気予報が当たって雨天。客はまばら。露店の方も売上げのことを考えているのか、元氣なく見えた。すぐに本降りになった。それがしばらく続きグラスアリーナも走路も水浸しになった。スタンドにいても雨が降り掛ってくる。空が光り、雷鳴がとどろいた。その状況のなかで10時からのオープニングパレードの中止、続いて日本古式弓馬術協会の流鏑馬の中止のアナウンスがあった。それから豪雨は断続的に続いたため、大半の催しを取り止めた。

しかし雨中をぬって実施された警視庁交通機動隊騎馬隊のレプリーズにあつてはスタンドから、相馬野馬追執行委員会の甲冑競馬、小学生のポニー競馬等にあつては、傘を差して、またはレインコートで雨をよけながら走路の前で市民は応援の歓声を挙げた。またアメリカン・ミニチュア・ホースとのふれあいコーナーでは、スタッフによるおもしろおかしい説明で取り囲んだ親子連れが笑いながら馬についての知識を学んでいた。

雨に濡れながらも約3,100人もの市民が楽しんだ。



甲冑競馬



レプリーズ



雨の中、開催を待つ市民



待機するスタッフ

チャグチャグ馬コに帯広競馬場から、初参加!

三宅 洋一

今年のチャグチャグ馬コは6月12日(土曜)に快晴のもとで、毎年ながらの五色の波と涼しげな鈴の音が織りなす初夏絵巻として、滝沢村の蒼前(そうぜん)神社前から出発して盛岡市内へ93頭の馬のパレードが繰り広げられました。

そのパレードで今年ひときわ目立ったのは、北海道・帯広競馬場からの初めてのお目見えです。これには2頭の馬(リッキー号、ミルキー号)と、調教師の服部義幸さん、谷あゆみさん達5名がフェリーを乗り継いで参加しました。15kmのパレードは馬にとっても、引き手にとっても過酷なものでしたが、帯広からの参加者は流れる汗をものともせず、とても満足そうでした。

リッキー号とミルキー号は伝統の馬装束に着飾られて、岩手の馬にも負けな立派な姿を披露しました。

私は“追っかけ屋”に徹して、徒歩とタクシーを使ってパレードの先々で待ち受け、その勇姿を写真に収めることに夢中でした。ただ、残念だったのは「帯

広ばんえい競馬」の「のほり」が見られなかったことです。来年はまた皆とチャグチャグ馬コに参加して、帯広ばんえい競馬の宣伝、「とかち馬文化を支える会」への支援・協力要請に努めようと思います。

(みやけ・よういち とかち馬文化を支える会監事)



盛岡市内のパレード風景



初参加を終えて満足気のリッキー号、服部さんと谷さん

馬の切手

たうち こうさく
田内 昂作
(馬の切手収集家)

イタリア

紀元前7世紀頃、都市国家ローマに始まり、1861年にイタリア王国として誕生。国土面積は30.1万平方キロメートル。馬飼養頭数は30万頭。重種はブルトンの血が入ったイタリア重挽馬がいる。山岳ポニーのバルディジャーノ、ハフリンガーのイタリア版で駄載用として山岳地帯で使われているアヴェリナーゼ、乗用や挽用など多用途に活用されているマレンマーナ、繋駕競走用のイタリアントロッターなどが生産されている。何と言ってもイタリアの馬産を語るときに欠かせないのがフェデリコ・テシオ(1889～1954)であり、彼の生産したネアルコトリポーはその後のサラブレッドの世界に大きな足跡を残した。



イタリア・ダービー 100年
イタリアの近代競馬の歴史はイギリスなどに比べると浅く、その始まりは、1800年代に入ってからである。現在約30の競馬場で1年中開催されており、平地よりも繋駕競走を行う競馬場が多く夏はナイトー競馬が行われる。イタリアダービーはローマのカバンネレ競馬場で行われる。
(1984年発行)



伝統行事・パリオ

イタリア中央に位置する中世の面影を残す町シエナのカンポ広場で毎年7月2日及び8月16日に行われる17ある町内会(コントラダ)の対抗競馬で最初に行われたのは1147年。出走馬は10頭(町内会)で抽選による。競馬は広場に設けられた特設馬場を3周、馬は鞍をつけない裸馬で、騎手は落馬しても関係なく馬さえゴールすればよい。切手に描かれている先頭の馬には騎手がいない。1着になった馬(町内会)に優勝旗が授与され、この優勝旗を「パリオ」という。
(1981年発行)



国際司法情報会議
(1983年発行)



欧州共同体設立・ローマ条約40年
(1997年発行)



戦場のガリバルディ
(1970年発行)



芸術文化遺産
(1988年発行)



世界馬術選手権
(1998年発行)



切手の日
(1975年発行)



詩人タッソーニ誕生400年
(1965年発行)



ナポリのサンカルロ劇場
(1987年発行)



(1983年発行)



(1987年発行)
伝統行事



(2010年発行)



ガリバルディ死去50年
(1932年発行)



ガリバルディ誕生150年
(1957年発行)

第23回日本ウマ科学会学術集会のお知らせ

日 時 2010年11月29日(月)14:00より
11月30日(火) 8:30より

場 所 東京大学農学部 弥生講堂(一条ホール・アネックス)、3号館教授会室

プログラム 11月29日(月)一般口演・総会・企業展示・JRAとの合同懇親会

11月30日(火)一般口演・シンポジウム・WEVA特別講演(外国人講師2名)・企業展示
馬臨床獣医師ワーキンググループ症例検討会・招待講演(外国人講師1名)

なお、11月29日は、第52回JRA調査研究発表会が併行開催されます。

参 加 費 会員3,000円／非会員5,000円／学生1,000円(会員・非会員を問わず)

【シンポジウム】(3号館教授会室／11月30日 13:00より)

テ ー マ 最近の乗馬事情を知ろう!

座 長 局 博一(東京大学)、青木 修(日本装蹄師会)

(1)障害者乗馬(国際大会)への挑戦 浅川 信正(静岡乗馬クラブ)

(2)高校生とウマとの触れ合い(静内農業高校生の挑戦) 杉本 忠宏他(静内農業高校)

(3)明日の馬術界を読む－欧州事情を踏まえて－ 北原 広之(JRA馬事公苑)

(4)日本の乗馬生産の今日と明日 藤田 知己(全国乗馬倶楽部振興協会)

詳しくは日本ウマ科学会ホームページ(<http://www.equinist.go.jp/JSES/index.html>)をご覧ください。

にっぽん、馬紀行

新宿高野ビル4FコニカミノルタプラザギャラリーCにて、2010年3月24日(水)～4月2日(金)の10日間、高草操氏の写真展が開催された。

今回の写真展では、日本在来馬8種(北海道和種、木曽馬、野間馬、対州馬、御崎馬、トカラ馬、宮古馬及び与那国馬)と下北半島の寒立馬、隠岐島の馬の写真約50点が展示された。各地の愛嬌たっぷりの馬たち、母に戯れる仔馬の姿を観て訪れた方々は、馬のいる遠い長閑な風景を思い浮かべたように見えた。いつかその地でこの馬たちと会ってみたいと。

次回氏の写真展は、12月中旬から3月初旬まで世田谷「馬事公苑」で開催される予定とのことである。



写真展入り口で 高草 操氏

案内状

● 地方競馬全国協会からのご案内

「地方競馬の馬主になりたい!」という方は地方競馬全国協会までご連絡ください。
地方競馬の馬主登録制度についてご案内いたします。

なお、地方競馬の馬主情報については、**地方競馬情報サイト**(<http://www.keiba.go.jp/>)でもご覧になれます。

(担当:審査部登録課 電話03-3583-2142)

書籍紹介

市川先生著作選集



編集 市川健夫先生著作集刊行会
 発行者 第一企画株式会社(著作集刊行会事務局)
 〒380-0803 長野市三輪一丁目16-17
 tel026-256-6360

本著作選集は、東京学芸大学退官後の350編を超える論説・エッセイなどの著作から74編を厳選して全4巻に収録されたものである。

先生は地理学が専門であるが、ご出身が長野県小布施町であることから高冷地、寒冷地の農業に欠かせない生産手段であった馬について研究をされている。16編が収録されているシリーズ第3巻「牛馬と人の文化誌」には、主に日本列島全体あるいは日本列島各地の馬に関する考え方を書かれておられる。

その第1章「文化地理の指標となる畜産」では西日本の牛地域と東日本の馬地域について検証され、第2章「馬とひととの歴史—日本史にみる馬産と在来種8種の保存」では日本における馬の歴史と文化や馬耕がもたらした農業革命、第3章「ひとの暮らしと動物」では大陸からの馬文化の

接点・九州や在来馬の歴史、文化について書かれておられる。馬の存在を広い視野から捉えておられ、馬関係者にとって必読の書となっている。

日本列島の風土と文化

【第1巻】 青潮がはこぶ文化 【第2巻】 ブナ帯文化と風土
 【第3巻】 牛馬と人の文化誌 【第4巻】 日本農業と食文化

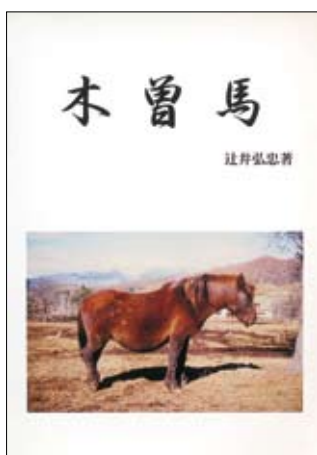


本書著作集刊行会会長の長野県短期大学学長上條宏之先生は、本書の「はじめに」で、「馬を必要とした農業などの生産手段の変化や流通の手段・機構の激変によって、本来持っていた役割を失っていった。その馬に注ぐ市川さんのまなざしはやさしく、保存運動への参画も積極的にみえる。」と印象を語られ、また「対馬、琉球諸島の宮古島などの在来馬について市川さんの具体的叙述にふれて、私はこれらの地を訪れたとき、在来馬に直接触れることができれば、しあわせなひとときを送れるのではないか、と思われてならなかった。」と結んでおられる。

書籍紹介

木曽馬

著者 信州大学教授 辻井弘忠 氏
 発行者 辻井弘忠教授定年退職記念事業会



信州大学農学部辻井弘忠教授が退職記念に木曽馬の集大成として、平成22年2月に本書を出版された。

あとがきの中で著者の辻井先生が、木曽馬の研究に携わることになった切っ掛けを書かれておられる。昭和56年に御崎馬の研究をされている宮崎大学の加世田雄時朗先生が信州大学に来られ、木曽馬を長野県民に貴重な動物であることを知らしめるべきだと力説されたのが初めてである。その後木曽馬保存会の伊藤正起会長に現状を教わり、日和田高原名鉄木曽馬牧場を訪ね研究を継続された、とのことである。

伊藤正起会長は、開田村の村長であり獣医師、また木曽馬保存会の創始者でもあった。木曽馬とともに生きてきた方で、営々と暮らしてきた木曽馬と人との関わりを平成8年に「木曽馬とともに」で著した。

また、長い間木曽馬の保存に役割を担ってきた日和田高原名鉄牧場は既に閉鎖されています。

本書は、1.木曽馬の成立 2.木曽谷における木曽馬 3.木曽馬の外貌 4.木曽馬の特徴 5.木曽馬の団体の行動 6.木曽馬およびポニーの迷路学習 7.放牧場における行動 8.木曽馬の繁殖 9.仔馬の行動 10.木曽馬の遺伝的特性の10章から構成されている。木曽馬に関する行動学から繁殖学、遺伝学まで科学的に研究された唯一の貴重な一冊となった。(非売品)

J

RAホースショー(第39回馬事公苑馬術大会)

春まっただなか、日差しが強く、気温は6月中下旬という暑さのゴールデンウィーク後半5月3日から5日の3日間、全国各地から133の人馬が参加し日頃鍛錬している乗馬技術を競った。本大会は日本中央競馬会の主催で毎年の恒例行事として定着しており、馬術の関係者にとっては優れ

た乗馬技術を鑑賞出来るいい機会となった。

なお、一般市民にも馬事公苑を開放し、子どもたちに楽しみながら馬に親しんでもらうという企画も盛りだくさん用意されており、3日間で約65千人の市民で賑わった。



- 1 展示馬とのふれあい
- 2 障害飛越競技
- 3 子ども達はふわふわパークで楽しんだ
- 4 物産店での賑わい

ち

びっ子“のまうま祭り”in うえのどうぶつえん

5月15日(土)及び16日(日)の両日、今治市産業部観光課の主催で子ども動物園ステージ及びホールにて「ちびっ子のまうま祭り」が開催された。2日間とも爽やかな日となり、子ども連れの家族で賑わった。

オープニングに菅良二今治市長の挨拶、続いて田畑直樹上野動物園副園長の挨拶のあと、司会の渡辺さんによる今

治市の位置、環境及び観光物産についての紹介があった。

続いて、ステージイベントにおいて、のまうまぬいぐるみ、のまうまフェイスタオル等オリジナルグッズの入ったエコバックほか抽選でプレゼントされた。

そのあと、のまうまハイランドのマスコットキャラクターまあくんとのんちゃんが登場し、こども達は記念撮影をして楽しんだ。



- 1 子ども動物園入口のまうま祭りのポスター
- 2 オープニング挨拶
- 3 マスコットキャラクターまあくん、のんちゃんとの記念撮影
- 4 ズーポケットでの野間馬のふるさと展

種雄馬7頭を配置

(社)日本馬事協会は、農用馬の生産振興と資質の向上を図るため、独立行政法人家畜改良センターから優秀な種雄馬7頭を入札により借り受け、9月1日以降北海道、岩手県、熊本県及び宮崎県の種雄馬管理団体に貸し付けた。

平成22年度センター有配置種雄馬



1 蜜 磨
平成20年3月3日生
産 地 十勝牧場

品 種	ブルトン	体 高	171cm	体 長	181cm
毛 色	栗毛	胸 囲	227cm	管 囲	27.8cm
血 統	父／ラヴリー ド レトワール 母の父／槍 参 母／研 銚 母の母／的 伯				
配置先	こばやし農業協同組合				



2 蜜 鷗
平成20年4月3日生
産 地 十勝牧場

品 種	ブルトン	体 高	176cm	体 長	182cm
毛 色	栗毛	胸 囲	223cm	管 囲	29.2cm
血 統	父／ラヴリー ド レトワール 母の父／オヌール 母／凰 玷 母の母／雲 剣				
配置先	ホクレン農業協同組合連合会 札幌支所				



3 音 桃
平成20年2月20日生
産 地 十勝牧場

品 種	ブルトン	体 高	164cm	体 長	181cm
毛 色	栗毛	胸 囲	214cm	管 囲	27.2cm
血 統	父／ネスタードカリュー 母の父／オヌール 母／梅 琉 母の母／花 鋭				
配置先	盛岡畜産農業協同組合				



4 音 毛
平成20年3月27日生
産 地 十勝牧場

品 種	ブルトン	体 高	171cm	体 長	181cm
毛 色	栗毛	胸 囲	223cm	管 囲	27.4cm
血 統	父／ネスタードカリュー 母の父／オヌール 母／鷹 玷 母の母／鵜 槍				
配置先	熊本県畜産農業協同組合				



5 禄 佳
平成20年3月15日生
産 地 十勝牧場

品 種	ベルシュロン	体 高	177cm	体 長	186cm
毛 色	青毛	胸 囲	220cm	管 囲	28cm
血 統	父／メネシスデュムラン 母の父／コブー 母／駕 験 母の母／雅 釧				
配置先	熊本県畜産農業協同組合				



6 禄 宙
平成20年3月26日生
産 地 十勝牧場

品 種	ベルシュロン	体 高	169cm	体 長	179cm
毛 色	青毛	胸 囲	217cm	管 囲	27.7cm
血 統	父／メネシスデュムラン 母の父／コブー 母／容 篤 母の母／寛 桐				
配置先	九戸畜産農業協同組合				



7 芯 福
平成20年4月16日生
産 地 十勝牧場

品 種	ベルシュロン	体 高	175cm	体 長	182cm
毛 色	芦毛	胸 囲	213cm	管 囲	26.8cm
血 統	父／トウカイシンザン 母の父／克 慈 母／裕 地 母の母／幕 西				
配置先	釧路農業協同組合連合会				

馬能力向上推進事業 (馬能力評価の調査・検討事業)が開始される

(社)日本馬事協会では、(財)全国競馬・畜産振興会の助成により、3ヶ年計画で馬の能力を科学的に評価するシステムの構築を行うこととなった。

1.目的

近年、乗馬人口や乗用馬頭数の増加がみられ、国際大会において活躍する馬も生産されてくるなど、国内生産馬の質の向上が図られつつある。

しかしながら、馬の能力評価について明確な指標がないのが現状であり、更に血統情報、競技成績等の情報は一元化されておらず、生産や流通に活かされていない状況にある。

今後、更なる馬事振興を図るためには、生産馬の質を一層向上させ、優良馬の安定的生産体制を整備し、需用者への積極的な情報提供による流通の活性化を図る

ことが必要である。

このため、競走馬以外の国内生産馬の遺伝的能力評価方法について調査・検討するとともに、個体情報の統一化を図り、血統、競技成績等の情報を生産・流通に活用できるシステムを構築することにした。また、能力を数値化して客観的に評価するための能力評価方法のプロトタイプを作成し、これにより国内生産馬の質の向上の一助とすることにした。

なお、事業の進め方や進捗状況等については、逐次、本誌で紹介することにした。

2.馬能力向上推進事業の年度別事業概要

項 目	事 業 内 容	年 度 別 実 施 計 画		
		初 年 度	平成23年度	最終年度
1.馬能力向上推進委員会開催等事業				
(1)事業推進委員会	学識経験者等からなる馬能力向上推進委員会を開催し、事業の総合的な実施方針等の検討を行うとともに、最終年度において自己評価の検証を行う。	事業内容の推進に関する検討及び達成目標の検証等を行うための委員会を開催する。	事業内容の推進に関する検討等を行うための委員会を開催する。	事業内容の推進に関する検討及び達成目標の自己評価の検証を行うための委員会を開催する。
(2)国内生産馬能力評価方法検討委員会	有識者からなる検討委員会を開催し、国内の生産実態に即した能力評価方法の検討を行う。	能力評価方法の検討及び国内外の情報収集を行うための委員会を開催する。	能力評価方法の検討及び国内外の情報収集を行うための委員会を開催する。	能力評価方法の検討及び国内外の情報収集を行うための委員会を開催する。
(3)馬事関連団体連携委員会	馬事関連団体の連携システムの構築に向け、システムの構築における各団体の課題の整理及び情報公開の充実を図るための検討を行う。	連携システムの構築を行うための委員会を開催する。	連携システムの構築を行うための委員会を開催する。	連携システムの構築を行うための委員会を開催する。
2.馬個体情報一元化システム改修事業				
個体情報システム改修	馬の個体情報の統一的な管理に向け、馬事関係団体の登録馬をホームページ上で一致させるためにデータベースの一部を改変する。		馬事関係団体の登録馬をホームページ上で一致させるためのデータベースの一部を改変する。	
3.馬能力評価方法の調査・検討事業				
(1)海外能力評価方法実態調査	海外における馬能力評価方法等について調査を行うとともに海外情報を収集する。	海外における馬能力評価方法等について調査を行うとともに海外における情報を収集する。		
(2)国内実態調査	国内生産馬に求められるニーズ及び収集可能データ等を把握するため、アンケート調査を行う。	乗馬クラブ、農用馬関係者等に対してアンケート調査を行う。		
(3)馬能力評価方法	海外及び国内調査結果に基づき、馬能力評価方法のプロトタイプを作成を行う。		馬能力評価方法のプロトタイプの作成を帯広畜産大学に委託する。	馬能力評価方法のプロトタイプの作成を帯広畜産大学に委託する。

3.馬能力向上推進事業の各委員会関係図

馬能力向上推進委員会

開催期間:平成22年～24年度

【構成】 学識経験者、馬事関係団体 等

【目的】 事業（馬育成調教技術普及事業を含む）の総合的な実施方針の策定、各専門部会での検討事項に対する指導及び事業最終年度の自己評価

【活動内容】 ①能力評価方法検討委員会・馬事関連団体連携委員会の指導及び調整
②能力評価、連携システムの検討
③自己評価結果の検証

指導・調整

検討結果の報告

指導・調整

検討結果の報告

指導・調整

検討結果の報告

国内生産馬能力評価方法検討委員会

【構成】 馬及びBLUP法に関する有識者（学識経験者、馬事関係団体等）

【目的】 馬能力評価方法の確立に向けた課題の整理及び検証

【活動内容】
①馬能力評価方法の検討
②国内外の馬能力評価方法の検証
③情報収集及び課題の整理

開催期間:平成22年～24年度

データ要求

連携等によるデータ分析にかかる素材の提供

馬事関連団体連携委員会

【構成】 馬事関連団体

【目的】 馬個体情報一元化システムの構築

【活動内容】
①情報一元化システム構築に向けた課題整理
②情報公開に向けたデータの整理状況の確認
③情報一元化システムの検討

開催期間:平成22年～24年度

馬育成調教技術推進委員会 (事業主体:全国乗馬倶楽部振興協会)

【構成】 馬事関連団体

【目的】 生産者当の育成調教技術に関する検討

【活動内容】
①育成調教についての課題整理

開催期間:平成22年～24年度

種雄馬管理規程及び乗用雌馬貸付規程の一部改正並びに種雄馬配置料規程の制定について

当協会は、馬の改良増殖に資するため、昭和50年7月1日付けで種雄馬管理規程及び特別賦課金賦課徴収規程を、また昭和56年8月20日付けで乗用雌馬貸付規程をそれぞれ制定し、それらに基づいて種雄馬の配置及び乗用雌馬の貸付を行っており、その総数は約1,000頭に達しようとしております。この間、幾度か規程の改正を行って対応してきたところですが、この度種雄馬の主な貸出元であ

る独立行政法人家畜改良センターの業務方法書が平成21年12月28日付けをもって大幅に改正されたことと、これまで貸付（配置）先を会員等に限定していたのを、会員以外にも貸付ができるようにするため、規程改正するものであります。

なお、この規程改正は、平成22年8月24日の第2回理事会で承認されました。以下にその要旨を掲載します。

1. 種雄馬管理規程の一部改正

- (1) 日本馬事協会の会員等に限定されている種雄馬の配置先を広く農業協同組合その他の団体に拡大する。
- (2) 配置申請の提出期限を「前年の10月31日まで」としていたが、配置種雄馬の実態に合わせて、「会長が定める日まで」とする。
- (3) 種雄馬の配置を受ける種雄馬管理団体は、「配置料」を支払わなければならないこととする。（配置料の額等については、「種雄馬配置料規程」で定める。）
- (4) 種雄馬の配置先を会員以外にも拡大したことから、特別賦課金は徴収しないことにし、「配置料」として統一する。
- (5) 地方競馬全国協会の補助を受けて購入した協会有種雄馬の配置期間は6年とし、その他の種雄馬についての配置期間は、個別の貸付契約で定めることとする。
- (6) この改正規程の施行日は、平成22年8月25日とし、配置期間についての規定は平成22年7月1日から適用するとともに、所要の経過措置を講ずる。

2. 種雄馬配置料規程の制定

- (1) 種雄馬管理団体が種雄馬管理規程により支払う配置料の額等について定めるため、種雄馬配置料規程を制定する。
- (2) 配置料の対象とする種雄馬は、日本在来馬を除き、当協会が配置している全ての種雄馬とする。
- (3) 独立行政法人家畜改良センターが所有する種雄馬の貸付料が有料化されたことに伴い、配置料全体の料金体系を見直し、配置料の額を別表のとおりとする。
- (4) この規程の施行日は、平成22年8月25日とし、特別賦課金賦課等徴収規程は、廃止する。
- (5) 平成22年7月1日に配置されていた種雄馬の平成22年分の特別賦課金及び事務手数料の額及びその徴収方法は、なお従前の例によることとする。このことにより、当該種雄馬の配置に対する平成22年分の対価は、「配置料」としてではなく、これまでどおりの「特別賦課金」又は「事務手数料」として徴収されることになる。

3.乗用雌馬貸付規程の一部改正

- (1) 規程の名称を「乗用種雌馬貸付規程」に改める。
- (2) 日本馬事協会の会員に限定されている種雌馬の貸付先を広く農業協同組合その他の団体に拡大する。
- (3) 種雌馬の貸付料に対する対価の名称を「事務手数料」から「貸付料」に改め、その貸付料の額を種雄馬配置料にならって整理する。
- (4) 貸付期間については、個別の貸付契約で定める。
- (5) 輸送保険への加入、損害の賠償等については、種雄馬管理規程と同様の規定を設けることとするほか、所要の規定を整備する。
- (6) この改正規程の施行日は、平成22年8月25日とし、平成22年7月1日に貸し付けられていた種雌馬の平成22年分の事務手数料の額及びその納入については、なお従前の例によることとする。このことにより、当該種雌馬の平成22年分の貸付けの対価は、「貸付料」としてではなく、これまでどおりの「事務手数料」として納入してもらうことになる。

なお、平成22年8月25日付けで改正された種雄馬管理規程及び同日制定された種雄馬配置料規程並びに同日改正された乗用種雌馬貸付規程については当協会ホームページにおいて公開することにしております。

別表

種雄馬配置料規程、乗用種雌馬貸付規程による配置料及び貸付料

規 程	名 称	区 分				現行規程	新規程	備 考		
種雄馬配置料規程	配置料	種雄馬	会有馬	農用馬	平成17年以降の購入馬	配置後6年まで	配置後3年まで	購入価格の3.0%	同左	現行規程では特別賦課金
							配置後4～6年まで	購入価格の2.5%	同左	
					配置後7年以降		供託金納付と引き換えに譲渡	同左		
					平成16年以前の購入馬			現在無料	5,000円	
				乗用馬	購入馬	配置後6年まで	配置後3年まで	購入価格の1.5%	同左	現行規程では特別賦課金
							配置後4～6年まで	購入価格の1.0%	同左	
			配置後7年以降		現在無料	5,000円				
			寄贈馬	配置後6年まで		10,000円	同左	現行規程では事務手数料		
				配置後7年以降		無料	5,000円			
					センタ－有・ その他有馬	農用馬・乗用馬	配置後6年まで		10,000円	同左
配置後7年以降		無料					5,000円			
乗用種雌馬貸付規程	貸付料	乗用種雌馬	配置後6年まで				10,000円	同左	現行規程では事務手数料	
			配置後7年以降				無料	5,000円		

注) 実質的に変更になったところを ■ で表示した。

【第63回総会】 農用馬、乗用馬の積極的な生産振興支援へ

通常総会で平成22年度事業計画を承認

社団法人日本馬事協会（赤保谷明正会長）は平成22年6月4日、馬事畜産会館会議室で第63回通常総会を開き、平成21年度事業報告、同収支決算並びに監査報告などを承認、続いて平成22年度事業計画、同収支予算を決め、任期満了に伴う新たな理事20人（うち新任3人）と監事2人（うち新任1人）を選任した。

平成21年度は、①乗用馬の生産振興事業②農用馬の生産振興事業③種馬の登録事業④馬事畜産普及啓発対策⑤在来馬保存活用推進事業などに積極的に取り組んできた。

特に、農用馬の生産環境が、引き続き厳しいことから、前年に続いて、ばんえい用馬生産振興支援として、優勝馬等を生産した者に生産者賞を交付する事業を行った。在来馬については、保存活動の基礎となる登録において、懸案であった原産地主義（原産地で生まれたもの以外は当該品種として登録の対象としない）を撤廃することとした。

併せて特別会計では新規事業として（財）競馬・畜産振興会からの助成により、国際的なアニマルウェルフェアへの取り組みの進展に対応して、我が国においても科学的知見に基づいた馬の飼養指針を策定することを目的とした「アニマルウェルフェア飼養管理確立推進事業（H21～23年事業）」に着手した。

平成22年度事業計画では、引き続き農用馬、乗用馬の生産振興支援、登録事業の推進、在来馬の保存活用、さらには事業2年目となる「アニマルウェルフェア飼養確立推進事業」等を実施していくほか、国内生産の農用馬、乗用馬の能力を向上させるための能力評価方法の確立を目指した「馬能力向上推進事業」が中央競馬会の公募事業として認可されたことから、新たな事業として取り組んでいく。



また、協会の組織のあり方として、平成23年度において公益社団法人としての認定申請を行うべくその準備を進めていく。

選出された役員は次の通り。

- 会長＝赤保谷明正
- 副会長＝小川諄
- 専務理事＝倉澤景晴
- 常務理事＝安武正秀
- 理事＝穴見盛雄、大西昭男、金谷和夫、神谷孝之、
枳穀勝久、草野信一、小瀬泰、小谷敏彦（新任）、杉野毅、高橋勝義（新任）、田中勝已（新任）、千葉伝、時田茂光、信國卓史、山内正孝、山本勝博
- 監事＝石田生男（新任）、川野洋和

【平成21年度】

優良農用馬生産者を表彰

(社)日本馬事協会(赤保谷明正会長)は、3月28日午後6時30分から帯広市の北海道ホテルで、平成21年度優良農用馬生産者表彰式を開催した。イレネー記念(3歳オープン定量、3月14日実施)とばんえいオークス(3歳牝馬オープン定量、平成21年12月13日実施)に出走した馬の生産者を表彰した。

農用馬生産者表彰は、地方競馬全国協会の補助を受けて平成10年度から実施してきた。表彰対象レースは、当初「ばんえい記念」と「ヒロインズカップ」としていたが、生産者表彰の趣旨を踏まえた場合、対象レースは生産者により密着したレースであることが望ましいことから、牝馬のレースを平成14年度表彰において「ヒロインズカップ」から「ばんえいオークス」に変更した。そこで、本年度から牡馬関連レースにおいても、生産からレースまでの期間が短く、同一の世代が競う生涯に一度しか出走出来ない、生産の指標となる由緒あるレースに見直すこととし、表彰対象レースを「ばんえい記念」から「イレネー記念」に変更することとした。

なお、「ばんえい記念」については、上位3頭に入賞した馬の生産者を、本表彰式場で別途表彰することとした。

開催に先立って、赤保谷会長は「新生ばんえい競馬が始まり3年が経過しました。砂川市長を初めとして関係各位の努力の賜であります。開催成績も厳しい状況にあるようですが、5重勝馬券が1月9日に発売されて以来、前年を超える発売成績を上げていますと聞いております。また競馬場の複合施設化につきましても商業施設がこの夏にオープンすることによって楽しみであります」と期待した。来賓の農林水産省大野畜産振興課長は「競馬がこれほど身近に観戦でき

るばんえい競馬の素晴らしさ、ファンと一体化した熱戦に感動を覚えた。また、表彰式典も親しみやすく雰囲気も好い。農林水産省としても最大限の支援をしたい」と挨拶された。既にこの4月で引退を表明した砂川市長は、晴れやかな笑顔で「至る所で馬が見られたかつての十勝地域について思いを馳せ、市長としてばんえい競馬を残せてよかった」と感慨深く語った。北海道出身の地方競馬全国協会の澤井副理事長は「子供のころのおやつでもあった“いもだんご”を競馬場内の売店で見つけて感激した」と述べ、「ばんえい競馬の存続とこれを支える農用馬生産者に出来る限りの支援を行いたい」と力強く宣言され、声高らかに乾杯の音頭を取られた。

式典では、生産者表彰に続き当日実施された暑い戦いのばんえい記念、イレネー記念及びばんえいオークス競走の実施状況が会場内の大画面に映し出され、生産者や式典参加者、一般のファン招待者等数百人で賑わった。また、壇上では優勝騎手、優勝調教師らのインタビューが行われた。

祝宴では恒例の馬肉を素材とした種々の料理に参加者は舌鼓を打ち、8時30分過ぎまで大いに意見交換し賑わった。

平成21年度 優良農用馬生産者表彰式典



●優良農用馬生産者賞 受賞者【18名】●

第41回イレネー記念競走(9名)				第34回ばんえいオークス競走(9名)			
地区	氏名	住所	馬名	地区	氏名	住所	馬名
北	十勝	佐々木啓文	帯広市	北	十勝	加納友喜	河西郡芽室町
	十勝	坂東孝一	中川郡池田町		十勝	岩岡昇	広尾郡大樹町
	十勝	風間進	中川郡本別町		十勝	木幡豊	中川郡豊頃町
	十勝	横山伴英	中川郡本別町		十勝	佐渡孝徳	中川郡幕別町
海	十勝	門志美	中川郡豊頃町	海	釧路	坂井三智	川上郡標茶町
	十勝	広川利明	十勝郡浦幌町		上川	(株)坂井牧場	旭川市
	釧路	坂井三智	川上郡標茶町		上川	外崎敬雄	中川郡美深町
	釧路	樋口愛子	釧路市厚沢部町		網走	芝桜高橋牧場	紋別郡滝上町
道	網走	千葉守	紋別郡滝上町	道	網走	田村正	北見市

●日本馬事協会人事

採用 総務部長 重田賢司(4月1日付)

退職 総務部長 山崎慎介(3月31日付)

日本馬事協会は団体会員、個人会員の皆様を始め、ご支援いただいている方々へ活動近況のご報告を兼ねて機関誌「馬事協会便り」をお届けいたします。10月、3月と年2回発行を予定しています。

馬事協会便り
5号

2010年10月20日発行 発行者/倉澤 景晴
発行所/社団法人 日本馬事協会 TEL03-3297-5626
http://www.bajikyo.or.jp E-mail:jeaa@bk9.so-net.ne.jp
印刷/日本印刷株式会社



蹄鉄、バリカン（中野市）
大正時代、小池蹄鉄屋が蹄鉄競技会で一等賞になったときのもの
34×44.5×10cm



蹄鉄を付ける際に使用する道具一式（中野市）

（中野市経済部商工観光課蔵：山岸安信コレクションから）

社団法人 日本馬事協会

〒104-0033

東京都中央区新川2-6-16（馬事畜産会館7F）

TEL.03-3297-5626 FAX.03-3297-5628

URL <http://www.bajikyo.or.jp>

E-mail jeaa@bk9.so-net.ne.jp